

# 博士学位論文内容の要旨

学位申請者氏名	陳 鳳
論文題目	中国における伝統的社会集団の歴史的変遷とその現状 華北山西省農村を事例として
論文審査担当者	主 査 竹 安 栄 子
	審査委員 首 藤 明 和
	審査委員 松 下 洋
	審査委員 東 元 春 夫

## I. 問題の所在と目的

本論文は、中国村落社会における伝統的社会集団の歴史的変遷とその現状について、社会学における集団類型の概念を援用しつつ考察し、伝統集団が果たしてきた役割と現代的意義を明らかにしようとするものである。

中国村落社会では、血縁集団と地縁集団がきわめて重要な意味をもつのは周知のとおりである。農村社会の統治にあたって中国史上の各王朝政権は、行政組織を村に設置することはなく、旧中国農村社会の基層構造をなしたのは血縁集団と地縁集団であった。このような伝統的集団が、人々の社会関係を結びつける紐帯であり、村落を運営する上で力を発揮し、それが郷村自治に多大な影響を与えていた。とりわけ、血縁集団の宗族は中国の長い歴史の中で連綿と受け継がれており、中国を理解する上で最も重要なキーワードの一つであることから、これまで国内外の多くの研究学者が宗族を分析対象として研究し、数多くの成果を残している。かれらはそれぞれ独自の方法論や分析視点で宗族にアプローチし、さまざまな議論を積み重ねられてきたが、なお多くの課題が残されている。

また地縁集団の「社」について言えば、それが村落社会で果たしてきた役割、宗族との関係、ならびに統治政権側との関係など、さまざまな側面での考察を欠いているため、中国村落社会のもつ特性が十分に明らかにされていない。

これらの課題を踏まえ、本論文は、序章、第1部と第2部の構成で、以下のように考察を行う。

## II. 各章の要約

序章では、中国社会の現状を説明し、宗族と社研究において欠如している問題意識の所在を明確にし、さらに本論文の研究目的、調査地の選定および論文の構成について論述する。

第1部では、宗族と社の結合類型と差異を中心に中国村落社会における結合関係に関する諸問題を再検討する。

第1章では、中国村落社会における結合の特質について確認する。第2章では、中国、日本と欧米それぞれでなされた宗族に関する先行研究を概括する。第3章と第4章では、第2章の議論を踏まえ、先行研究における宗族に関する見解の多様性と対立について整理・考察する。

第5章では、現在までの宗族研究における問題点を整理して指摘した。すなわち、これまでの分析においては、宗族結合の南強北弱という差異が注目されてきたが、結合の本質(紐帯の質と目的)は論じられることなく、南北差異の要因についての分析も不十分なままである。改革開放後、経済的基盤がないにも関わらず、なぜ宗族復興の回帰現象があらわれたのかについての検討がなされていない。南中国の擬制的宗族集団が果たして血縁関係にある宗族集団と同じ性質のものであるか否かを再検討し、明確にする必要がある。

第6章では、社に関する先行研究を概括し、地縁集団研究における問題の所在を明確にした。

第7章では、第5章と第6章で提起した宗族と社に関する研究の諸問題に答えるための分析枠組みの提示を試みた。まずテンニース、高田保馬などの集団類型を検討するが、これらはすべて静的類型概念であり、多様な変容を示す中国の宗族と社を包括的に理解するためには動的類型概念が必要である。そこで清水盛光の集団論に依拠して新たな分析枠組みを提起している。

第8章では、南強北弱といわれ、多様な形態を示す宗族を、成立契機と結合目的にしたがって整理し、血縁型宗族と利益型宗族の2類型に類型化している。その上で、利益型宗族は根源的共同に基づく血縁集団の成立契機が変化した形態と結論づけている。

第9章では、血縁型宗族と利益型宗族の結合の差異を、同宗の意味と改姓の目的、族譜を編集する目的、宗族成員の資格の獲得、宗族成員間の地位配分の原則、祖先祭祀の対象と目的、贍族の対象と目的という6項目を取りあげて検証した。

第10章では、土地の所有形態に着目し、血縁型宗族と利益型宗族の差異を生み出した要因を、経済基盤の相違から論じている。南中国においては、大土地所有に基盤をもつ強大な宗族が成立した結果、弱小宗族や小作人層が大規模な宗族との利益結合の方向に向かったと考えられる。一方、北中国においては、多くが自作農であり、かれらは経済的に自立しているがゆえに経済面において宗族に従属する必要がなく、成立時からの血縁型結合を継承していた。このような経済基盤の相違が、南北中国における宗族結合の差異を生み出した要因の一つであり、宗族成員の結合の本質を規定した要素であると論じている。

結論としては、宗族集団は時代、生活環境、社会状況、経済基盤などによってさまざまに変化し続ける中で、血縁をより重視する結合形態と、利益をより重視する結合形態とに分化してきた。しかし、擬制的宗族であってもその成立の根拠は血縁・系譜の共同という根源的共同にもとづく集団であり、その意味において血縁集団であることは否定できないと結論づける。

第2部では、華北山西省農村の宗族と社の歴史の変遷と現状について検証している。

第1章では、華北と山西農村に関する先行研究を整理し、問題の所在と研究目的を明確にされた。

第2章では、2001年から2014年まで筆者によって実施された調査概要を述べられている。第3章では、山西省と調査村の概況と特徴について示されている。

第4章では、調査村の馬氏、閻氏、李氏という3つの宗族を事例に、それぞれ宗族の起源と現状を、成員間の地位配分関係、家長の役割、相互扶助の項目を中心に考察し、宗族の祖先祭祀儀礼を詳論した。

第5章では、調査村における社の歴史と現状について論じている。まず、調査村の社の概要に

について述べ、社単位で行われる「元宵節」、三官社と他の社の活動を通して、社の結合形態、成員間の関係などを明らかにした。そして、「銀錢流水帳」(1898年から1964年まで)の内容を検証し、社の役割の歴史的変遷を考察する。さらに、「元宵節」の開催をめぐる組織者と参加者の関係、参加者の構成の変化とそれに伴う意識の変化、社会の変化と行事への関心の変化、行事開催への財源の影響について論じている。最後に、社首の位置づけについて考察された。

第6章では、村と宗族・社の関係について論じられている。中国の歴史上、各王朝政権は農村社会を統治するにあたって、行政組織を村に設置することはなかった。しかし、王朝時代の徴税組織にしても民国時代の村内組織にしても、後の新中国成立以降にできた初級・高級合作社、人民公社時代の生産小隊および現在の村民委員会の下にある区にしても、すべて伝統的集団である社を存続させようという意思が働いて設置されたものだということが調査から明らかにされた。

第7章では、宗族・地域活動への参加という側面に視点を置いて、華北農村女性の地位の歴史的変遷が考察されている。女性の地位は徐々に向上したけれども、宗族においては男性優位の伝統的規範意識が依然として根強い。ここから、「男性のみが宗族の成員」という伝統的価値観が今も変わらず存在していることが伺える。一方、地域活動の中で、女性の果たす役割が重要になってきたことが明らかにされた。

終章では、華北山西省農村の調査の結果から、北中国の宗族では血縁関係の親疎が重視されていることが明らかとなった。宗族は祖先祭祀集団として機能し、かつ分裂によって絶えず宗族規模の小規模化を図ってきたことによって、北中国では成員の親睦を図り、関係を強化するために結束している。

中国社会の急速な変化に伴って人々の結合関係も変わりつつある中、宗族という言葉を使い続けている以上、中国人はやはりそこに父系血縁関係を認め、それを社会関係の要として捉えている。恐らく今後、宗族の結合形態がいかように変わっても、父系血縁関係を要とする宗族は存在し続け、村落における人々の結合の基本形態の一つとして、人々の生活の中で重要な役割を果たしていくと思われる。

以上の調査結果から宗族と社の関係について以下のように述べられている。祖先祭祀への参加は宗族成員の義務と捉えられており、極めて強い規範性を有している。それに対し、社というのは地理的に近い家々が、自主的に結集する地縁集団であり、社活動への参加も個人の自由意志に委ねられていて、それほど強い規範性を有するものではないのが特徴である。宗族は、世代を経て成員数が増加すると分枝するが、社が分枝した宗族を包含することによって地域的統合が維持されている。

政権側の必要によって村落内部において、いくたびも再編され、社という集団の役割も時代と共に変化してきたが、しかし、いつの時代の政権も伝統的な地縁的結合の存在を無視できなかった。したがって、社集団も宗族と同様に、村落社会で果たした役割が時代とともに様々な機能的な性質を有する集団に変化することもあったが、村落社会において、きわめて重要な存在であったことを再確認することができた。

今後、中国社会のさらなる変化に伴って、とくに農村の都市化によって、人々の流動が激しくなり、価値観が変化し、地縁で結ばれている人々の関係が脆弱になる可能性がある一方、村落運営が村民自治に任せられた現在において、事例で示したように、伝統的行事の継承などで村民た

ちが結束し、自分の力で解決することがあるかもしれない。その場合には地縁関係がより一層緊密になる可能性も推測される。